

医のあした

鳥取大医学部研究室レポート

◇10◇

教授室の書棚にずらりと並ぶ医学書。腎泌尿器学分野の武中篤教授(52)が「1万円もする本があるけど、正しいとは限らないんですよ」。

えっ…。記者の心配顔を察してか、すぐに始まったのが「外科解剖学研究」の説明だ。

人間の体の構造は分かっていることが多くにもかわらず、一度定着した見地は、医師も疑わないケースが多い。研究室が取り組むのは、いわば「常識」を疑う研究。

武中教授が手術を車の運転に例えて説く。「運転技術が高くて、案内がなければ目的地にたどり着けない。ルートは国道だけでなく、迂回路もあるはず。僕らの研究はカーナビの更新と強化です」

腎泌尿器学 外科解剖によるナビの強化

■前立腺がん急増

腎泌尿器科は、尿路生殖器のがんや排尿障害が専門だ。なかでも鳥取大病院が2010年に導入した内視鏡手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」による前立腺がんの手術実績は200例に上り、全国に誇る。

前立腺は、精液の一部を作る臓器で男性のみにある。食の欧米化などから近年、日本で前立腺がんの患者は急増。一方で早期がんの根治に有効な摘出術は、前立腺の周囲に走行する神経も切除し、排尿や性機能の障害が



研究室データ

教授＝武中篤(たけなか・あつし)。山口大医学部卒。神戸大医学部准教授などを経て2010年7月から現職。13年4月、鳥取大病院低侵襲外

科センター長を兼任。好きな言葉は「逆風を追い風に」。兵庫東加東市出身。

◆研究室メンバー
・助教＝八尾昭久、引田克弥、小林直人、森実修一、真砂俊彦
・大学院生＝岩本秀人、川本文弥、平野慎二、山口徳也、弓岡徹也
・外国人研究者＝ツナヒ

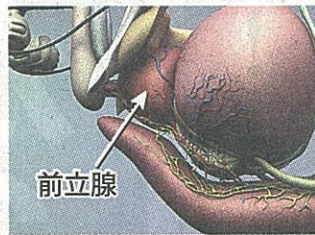
正史

教科書の常識疑い更新



手術支援ロボットを使用し前立腺がん手術に取り組む腎泌尿器学のチーム

残る欠点があった。分析していたが、視点東状に密集して存在させた。業界にはバイブルとを変えた。教科書が違るといふ「教科書の常識」とは異なり、前立腺に幅広く存在し、個人差が極めて大きいことが分かった。



膀胱(右)の左隣の器官が前立腺。直腸(下部)を中心に走行する黄色の線が勃起神経(イメージ)

「生活の質」維持
武中教授には胸が痛む過去がある。「病気は治ったが、生きていても仕方ない」。手術で排尿障害が残り、性機能も不全になった患者の言葉に、しばらく立ち直れなかった。

「遺伝子研究とかのほうが格好いい」とレンドルだけ、血管や神経のありようが分かっていないと治療はできない」と武中教授。地道な研究と確かな成果に裏打ちされた自信が伝わった。

前立腺がん以外にも、薬理学との共同研究で、過活動膀胱や勃起障害(ED)の原因が、骨盤内の血流不足が影響することを突き止めた。

上田素衣